

水田と焼畑

重層の生業戦略からみた複合的な生業

Paddy Fields and Burnt Fields :
Multi-Subsistence as Multi-Layered Subsistence Strategy

西谷 大

NISHITANI Masaru

はじめに

①問題の所在

②初保谷の土地利用

③水田

④考察

まとめ—重層の生業戦略—

【論文要旨】

本稿は中国海南省五指山市のリー族が住む初保谷を事例としながら、複合的な生業を考える上で、時代や地域を越えた普遍的な視点を提供することを目的としている。リー族の複合的な生業の特質を明らかにするには、個々の生業の特徴を述べるのではなく、水田、焼畑や、狩猟採集、有用植物利用の背後に通底する、彼らの自然資源利用の規範そのものを明らかにする必要があるのではないかと考えた。その規範とは「自分で植えたもの」と「生えてきたもの」によって所有が決定されていたということである。この所有の規範によってリー族は個人単位・村単位で、土地と自然資源を重層的に利用することが可能になったと考えられる。

また水田と焼畑は、灌漑システムの有無や栽培作物とその方法からみると、まったく異なるようにみえるのだが、リー族においてこの両者を維持させてきたシステムの根本は、所有に関する共通した規範だったと推測した。

地域の生業戦略を考える場合には、表面的な生業の相異や歴史的な変遷の背後に彼らの生業戦略の基本システムがどのようなもので何に依拠しているのかを明らかにする必要がある。地域の複合的な生業の特質とは、結局のところ生態的な環境の制約、地域の歴史、自然資源利用の規範などさまざまな要素の関係性の上になりたっており、その関係性を具体的に提示することが求められる。【キーワード】複合的な生業、水田と焼畑、「自分で植えたもの」と「生えてきたもの」、所有の民俗的規範、重層の生業戦略